て江湖に本書を薦むると共に、妄言を多謝する。

（菊版、本文一〇〇八頁、索引四三頁、昭和十年十二月、黄洋博士遺稿刊行會發行）定價拾貳圓

（塚本　善隆）

Les origines de la communauté bouddhiste de Loyang. Henri Maspero. Journal Asiatiqul, Tome 225, 1934, No. 1, PP. 87—107.

マスペロ氏は先に Le songe et l'ambassade de l'Empereur Ming. (BEFEO, X, 1901) をものして、佛教の支那傳來が明帝の「靈夢遣使」に依るとされるを、二世紀終頃洛陽の教團に生れた傳說に過ぎない事を論證された。然し早く佛教の行はれて居た事は、楚王英が信奉して居た事より明かな事實であり、前漢哀帝元壽元年（西紀前二）に博士弟子景盧の浮屠經を受けた事魏略がある。又支那渡來の外國人間に行はれて居た事もあつたであらう。佛教傳來の年代が確定されないならば、教團の初期の形態に關する考察は當然取上げらるべき問題である。マ氏は先の論文と同時に Communautés moines bonddhistes chinois au II° et III° siècles. (ibid. X, 1910) に於て教團に就て述べられたが、今回更に考察を進めて楚王英を繞る彭城の教團の性質を明かにし、般舟三昧經記に見ゆる許昌寺を考究して、彭城の教團と洛陽の初期の教團との間に一脈の聯絡ある事を立證せんとされたものである。

楚王英が明帝の詔に應じて罪を贖んが爲に黄縑、白紈を獻じた永平八年西紀六五の事件後漢書卷七二英傳は有名である。明帝は其獻物を返して伊蒲塞、桑門の盛饌を助けしめたが、これは明かに僧侶のみでなく信者のあつた事を示すものである。英の就國は建安二十八年西紀五二であるが、それより楚の彭城に其保護の下にあつた教團を考へて、マ氏は道家の仲介に依つて佛教が入つて來たものと考へる。乃ち此地方は漢代の道家の中心地であつたから、英も道家を奉じて居たが、同時に佛教をも信奉して居た。當時支那人には佛教も道家の一派と見做され、英の下に於ける彭城の僧侶等も方士と同じく長生の術を傳へる者と考へられて、教團を、少くとも佛教らしい道家（Taoisme bouddhisant）の教團を形成して道家の教團の中に擴がつて行つたのは、ローマ帝國に於けるユダヤ教とキリ

スト教の關係に同じく、僧侶も英の保護を求めて印度や中央アジヤから來たのではなく、當時支那に來て居た外國人に布教して居た若干の者が集つて來たものであらうとしてゐる。此教團は英の死後も絶ゆる事なく笮融を中心として殘つて居た。笮融は百九十年から百九十四年の頃に俘屠寺を建てた。後漢書卷百三陶謙傳

次に二世紀の終りの洛陽の教團に就て述べて居る。この教團は直ちに宮廷と結ぶ爲に重要性があり、相繼いで來た布教者は單に說經のみでなく譯經の難事業にも從事するに到つた。

洛陽で如何なる狀態の下に活動したか不明であるが安世高があり、更に竺朔佛、支讖がある。更に三世紀の初期には教團の中心として白馬寺と許昌寺が見られる。白馬寺は古いものであり、佛教傳來の傳說と結び付いて有名であるが其起源に就ては知られる所がない。許昌寺も何時からあつたか、如何なる狀態の下に存在したかは明かに知り得るものはなく、不幸にも白馬寺の有する如き傳說すらないのであるが、精密に觀察する時は許昌寺なる名稱は其由來を語り、同時に洛陽の教團の起源に就ても何等かの智識を得る事が出來るとして出三藏記集卷七の般舟三昧經記の考察に移つて居る。般舟三昧經記の全文を揭ぐれば次の如し。

般舟三昧經記　　未詳作者

般舟三昧經。光和二年十月八日。西紀一七九　天竺菩薩竺朔佛。於洛陽出。菩薩法護。時傳言者。月支菩薩支讖。授與河南洛陽孟福字元士。隨侍菩薩。張蓮字少安筆受。令後普著在。建安十三年西紀二〇八　於佛寺中校定悉具足。後有寫者。皆得南無佛。A　又言。建安三年歲在戊子八月八日於許昌寺校定。B

菩薩法護は竄入、建安三年は十三年の誤であるが、マ氏はAの前半は譯經の時西紀一七九　のものとし、Bは校定者の記載に他ならぬとし、建安十三年に於ける許昌寺の存在を確證すると共に、更に其存在を光和二年に遡らせ得る可能性をも考へて居る。

續いて許昌寺の由來の考察に移り、楚王英の舅子許昌と許昌寺との間に連絡を求め、今日の寺院は多く佛教又は宗派を頌讃する嘉號を持つてゐるが、これは三世紀の終りにも同樣に見られるけれども、今日では珍しい土地の名に依つた鄴中寺、洛陽大市寺等の如き、外觀に依つた五級寺、白塔寺等の如きものと共に、建立者に因んだ

長沙寺、羊叔子寺、孫泰寺等があるが、許昌寺なる名稱は嘉號とも地名ともされない。河南の縣名許昌は魏の文帝が黄初二年（西紀二二一）に許を許昌と改めた（三國志卷二）ので許昌寺は少くとも建安十三年（西紀二〇八）以前にあつたのであるからこれを人名に求むる他なしとして、漢代に見ゆる許昌なる人物に就て吟味し、一、二世紀に都に居た事、及び佛教を保護するに足る資力と地位が必要であり、更に其邸宅を寺としたか、少くとも邸内に禮拜堂を建てた事を條件とする時は楚王英の舅子の許昌に該當せしむべしと斷ずるのである。

許昌は英傳に見ゆる。永平元年（西紀五八）に龍舒侯となつた。更に著者に從つて其年代を擧ぐれば次の如きものがある。

（桓）鸞（略）（東觀記曰。鸞父良龍舒侯相也）（略）中平元年。（西紀一八四）一七十七卒于家。（後漢書卷六七）

桓郁（西紀九三年死）—良—鸞（西紀一〇八年生西紀一八四年死）

マ氏は英傳の記載より、當時幼少にして許氏の家長であつた許昌は、英の母許美人と共に彭城に居たが、後彭城から洛陽に英の死後に來た外國の僧侶及び若干の信者の爲に、洛陽の邸内に禮拜の所を與へて保護したので、これが徐光啓の名が徐家滙となつた如く殘つたのである。人名を直ちに寺院名とすることは孫泰寺（高僧傳卷八）の例があるから不都合はない。三世紀の初めに都に知られて居た寺を、一世紀半前の佛教の保護者である楚王英の家族許昌に結び付けて差支ない。此く考へれば洛陽の譯經に道家の影響の多い事も說明出來る。

此由來は、三世紀の初期に建られた白馬寺が却つて古い事を思はしめる樣な白馬寺傳說が作られた時尙知られて居たであらうが、佛教の保讓者として叛逆者の英より明帝の方が望ましい爲に、英も顧られず、許昌もそれ程重要な人物でなかつたので許昌寺の歷史も朧げになつてしまつたのである。

以上はマ氏の論文の大略である。支那の最初の佛教々團が楚王英を繞つて彭城を中心に存在した事は、明かに知られる所である。佛教が道家に取入ることに依て進路を開拓したであらうことも、既に考へられた事で、常盤博士も述べられた。許昌寺によつて彭城の教團と洛陽の教團との間に連絡を求めんとされた試は、支那佛教々團成立の考案の上の一つの新しい示唆とされるであらう。

（增村　宏）